

# 平安朝末期に於ける浄土教の展開

安藤正昭

種々の行業を積み、万行万善を修すれば西方浄土に往生し、遂に成仏出来ると云う信仰が即ち諸行往生思想で有る。

例へば西方浄土往生を願生しなからも、弥陀念仏行に依るとはせずして、種々の行業を積み、諸經論を善写して、又真言神呪を唱へ、觀念、觀察の行を積み、戒律を保ち、又諸佛菩薩を祀り、又弥勒信仰その他を伴ないし事により西方浄土に往生すると考えたものである。

ことに平安朝時代にあつては、西方浄土を刻念して、しかも法華を受持しその功德をもつて、西方往生に資するとする信仰が全盛をきわめ、法華と弥陀の信仰が何卒の矛盾もなく一貫併用せられた。

南白道長が寛弘四年に經典奉納しているか、その内容は、「法華經八卷」、「般若心經一卷」、「或仏經一卷」、「阿弥陀經一卷」、「弥勒上生一卷」、「下生一卷」であるが、經簡銘文によると、「阿弥陀經」は弥勒尊を念じ、臨終の時身心散乱せずに往生する為であり、「法華開結十卷」は釈迦の恩に報い奉り弥勒に値遇し救王に親近せんが為であり、「弥勒經」は九十億劫生死の罪をのぞき無生忍を證して、梵尊の出世を遇はんが為であり、と告げているか、こゝに諸行往生思想で有る。

つたとすべきである。

沐浴、沐浴、法華等が錯雜解行してゐるのであるが、沐浴の淨土に往生する事を本懷として積功累徳とし、法華を受持し念仏を唱え、造像供養したと思われぬ。

后拾遺往生伝上に記してゐる中宮篤子内親王も諸行往生思想の信仰者で、沐浴の淨土を願ひ、阿彌陀經を誦誦し、法華を書寫し又諸大衆經に眞言を誦する事三千餘部に至ると云ひ、武家階級に於ては丞源義老の如きは法華經を誦み、念仏を唱へ、法界の家生に回向し、「往生要集」を誦み、沐浴像を造り、逆修善根を造り、口には念仏を唱え、手には定印を結び、滅に入つた事を後拾遺往生伝中に記してゐるし、後拾遺往生伝下に於て一般庶民の事を記し、即ち近江國河尻の物部時宗は仏像を造り、經論を書寫して往生した事を記して居るし、又本朝法華驗記には陸奥國小松寺の玄海は法華全を誦み、大仏頂眞言七遍を誦し夢想で極樂に行き聖僧と會ひ、三年后にこの極樂に迎へると云う言葉を聞き、此れ此末玄海は眞言を唱へ、經典を誦み、三年后法華變化したと記してゐる。此等の如く平安朝時代に於ては出家、在家、貴族を問はず、一般庶民に至る迄、諸行往生思想信仰が風靡してゐたので有る。

國々の因縁果報により法華を受持し、眞言神呪を唱へ、又觀念を修し又般若心經、阿彌陀經、金剛般若等その他の大衆を書寫し誦誦し、釈迦、葉師、觀音、沐浴等の諸佛、諸菩薩、諸天を祈請し拜し建立供養し、之れを修する由縁功徳を以て極樂に廻向するとしたのである。

當時の沐浴信仰者に於ては、いわゆる持戒、菩提心、理觀、誦誦大衆行との四行をもつて、むしろ念佛そのものより重んじられる傾向であり、特に誦誦大衆行はよく用ひられた。その為各々の信仰対象、又はその内容頗る雜糅雜多となり、雜信仰となり、その最も著しいのは沐浴と法華

の親近結合であつた。特に前述の人々はほとんど西方極樂往生を念じながら法華經を修したりした事は度々例である。

この時代の享至供養の事に關して本朝文粹に述べている如く、ほとんどの享至は法華の三部と所誦地と般若心全で有るを常とせられて居る。

法華信仰者で殊勲の淨土と西方淨土又その他を願える者の中で西方淨土を願つて居た者が絶対的の多いと云う事から云つても、法華と念仏が結合的で親近してゐたかがうかがい知る事が出来ると同時に所誦と法華の兩信仰が調和してゐたかが知られる。

恵心の往生要集の送來狀書の中に「我が日本に有りては極樂界を刻念し法華に歸依する事熾盛なり」と唱してゐる如く、この時代の人々は法華を誦み、法華を受持し、その功徳をもつて西方極樂に向せんとしてたので有り、法華と念仏は切離す事の出来なく矛盾しないものとして法華と所誦の兩信仰を併用したのであるし、又法華と念佛は全く同一のものとし往生の爲には法華を受持し法華を受持する功徳によつて西方極樂淨土に往生する事を期したのである。

法華と念仏との兩信仰を行はる事が即ち極樂往生の道であると考へ兩信仰思想を行はる事が最も好ましいとされてゐたのであるが、しかしこの故に法華と念仏が併用され信仰されてゐる時、この併用を絶つて念仏のみ唱し、又他方法華一辺倒の者も有り、拾遺往生伝卷中、又は同卷下に記す如く信仰が單一となりそれを信仰する者もあつた。

即ち宗を自覺し信仰の対象が一つの人もあつた。后世に於て法然が現はれ專修專念を唱し、又法華奉行者の日蓮の老熟をなす人々もあつたわけである。

難信仰型態の諸行往生思想が純粹な信仰型態即ち鎌倉時代の一向專修の信仰へと移向するので有

るが、いふにしても、多くの行を積み、その功徳をもって往生すると云う思想から順次法華と念仏が併用され、その水を修す水は西方浄土に往生出来ると考へる域になり、当時の信仰思想を皮肉った一句に「夕立や法華かけ込む阿耨陀堂」と云う様な思想に迄展開し、その水が順次法華は法華、念仏は念仏と別れ、次の時代に来る、一向專修の思想信仰へと展開するのである。

しかし当時代に於てすでに專修專念の思想で行いたく々は僅かであつて、ほとんどの人は心に妙法華に帰し弥陀仏に念をかけた、法華を説み、弥陀の宝号を唱へるを常としていたのであり、朝に法華に誦誦し夕に念仏を唱へ、又朝に懺法を説み六根を懺悔し、阿耨陀堂を夕に誦み、西方の九品往生を祈つていた事は日本往生極樂記やその他にも記している。

「朝題目夕念仏」の思想が當時を風靡したこと、思想が盛んであり、常に念仏と法華が相伴つて絶対的風潮となつたのである。

この次に諸行往生思想から法華念仏の併用へと進み、后には一向專修へと展開するのである。この諸行往生思想は平朝時代の浄土教考察に当たつての一端にすぎず、平家の浄土教を研究する為に必要な事は、一つに時代背景の考察、二に天台宗の諸宗と浄土教信仰で、三には諸行往生思想、四つに本願思想、五つに末法思想の研究で之は必ず必要であり、その他にも法華と浄土教等重要な事は存すけれども、この提要の論文上に於てはその一つの諸行往生思想を取り上げたに過ぎないのである。